

はれぞら通信 vol. 2

～ 栽培中期編：11月～翌年2月頃まで ～

この度は、当社大玉トマト「はれぞら」をご利用ご愛顧頂き誠にありがとうございます。
本誌では、「はれぞら」を栽培する皆様にとって役立つ情報を3回にわたってお届けしております。

今回 vol.2 では、栽培中盤の栽培のポイントを中心にご案内してまいります。続けてお読みいただけましたら幸いです。

目次

はれぞらの特長

栽培時のポイント

- ✓ 栽培中期の管理のポイント
- ✓ 草勢が低下してしまったら…
- ✓ 露地定植 → ハウスフィルム展張後の注意
- ✓ この時期に注意する病害



八代市はれぞら現地検討会 in 熊本県八代市(2018年2月)

はれぞらの特長

- ✓ 黄化葉巻病耐病性
イスラエル、マイルド両系統に対して安定した耐病性を持つ
- ✓ 草勢が強め
草勢が強く、越冬時も成り疲れしにくい
- ✓ 早生
果房の収穫上がり早く、収穫のタイミングが揃う
- ✓ 肥大性が良い
低温期の果実肥大性に優れる
- ✓ 食味と硬さの両立
果実が硬く輸送性や店もちに優れ、食味食感も非常に良い



栽培時のポイント

✓ 栽培中期の管理のポイント

- 極端な灌水や追肥は避ける。はれぞらは窒素や水分に対する反応が早く草勢につきすぎる場合がある。草勢につきすぎている場合は「はれぞら通信 Vol.1」を参照して管理を行う。
- 気温の低下に伴い収穫のサイクルが緩やかになってくる。それに伴って追肥や灌水のタイミングも徐々に遅らせるように管理する。
- 収穫間際に着果負荷が最大となりそれ以後もその状態が継続していく。厳寒期に向けて、着果負荷に応じて少量多回数の追肥や灌水を行い、やや強めの草勢の維持に努める。
- 葉先枯れやすじ腐れ果の予防のため、追肥を行う時は初期の段階からカリウム (K) を通常よりも2割程度多めに施用する。特に曇天が続く場合、窒素成分中心の追肥は上記症状を助長することがあるので注意する。
- 日中の温度が低いと地温が上がり切らず根の動きが緩慢になり、カリウムや苦土の欠乏を助長する。
- 日中及び夜間の温度管理は共にやや高めの管理を行う。日中の換気は25~28℃を目安に管理し、夜温は12℃程度の温度設定で加温することが望ましい。



窒素過多及び日照不足によるすじ腐れ果



カリウム欠乏による葉先枯れ

✓ 草勢が低下してしまったら…

- 日照量や温度の低下と同時に、着果負荷がかかることで草勢が低下することがある。
- 過剰な下葉欠きを避け、適切な葉枚数と果数で草勢維持に努める。
- 花房直下枝の本葉を一枚残した状態で摘芯し、葉枚数を増やすことで必要な葉面積を確保する。
- 下葉欠きと誘引作業の間は1~2日間隔を置きストレスを分散させることが望ましい。

✓ 露地定植 → ハウスフィルム展張後の注意

- 品種特性上、フィルムを展張してハウス環境へ移行したときに、着果負荷が急激にかかり草勢が低下することが予想される。そのためフィルムを展張する前から安定した草勢の維持を念頭に置き、追肥開始のタイミングが遅れないように注意する。
- フィルム展張後、ハウス内の湿度が急激に上昇することによって、つやなし果や小さい裂皮(がさ玉果)の発生が助長される場合がある。その対策として適度な換気を行うと同時にハウス内温度の確保に努める。

✓ この時期に注意する病害

- ハウス内の湿度が上がり低温期に向かう条件では、灰色かび病に注意する。葉先枯れ患部の除去や適切な農薬散布を心掛ける。また芽欠きや葉欠きなどの管理は晴天時に行い、患部をよく乾かす。
- またこの時期には疫病の発生に注意する。発生すると一気にハウス内に蔓延するので適宜予防を行う。
- 抵抗性を打破する葉かび病に注意。近年、耐病性因子 Cf-9 を打破する葉かび病の発生が見られる。はれぞらは Cf-9 を有する品種であるが、ハウス内の湿度を適度に調整し予防を徹底する。



葉先枯れから侵入する灰色かび病



葉の裏側に発生している葉かび病

※ 次回「はれぞら通信 vol.3~栽培後期編~」は2月下旬頃にお届けいたします。



みかど協和株式会社

発行 みかど協和株式会社 国内営業本部開発普及部 <http://www.mikadokyowaseed.com>

PDF 版はこちらからダウンロードできます